

まちづくりを考えたら、
福祉にたどりついた

LET'S

浜松

認定NPO法人

クリエイティブサポートレッツ

On-Line-Crossroad
MATSUBISHI SHOPPING STREET



clets.net

Supported by
日本財団
THE NIPPON
FOUNDATION

When we were thinking about town planning,
we have arrived a welfare.

空き地に交差点をついたら そこに「あそび」が生まれた



オン・ライン・クロスロード

日時_2021.11.3(水・祝) - 11.7(日)

10:00 ~ 20:00 (最終日7日は17:00終了)

会場_松菱跡地(浜松市)

参加費_無料

アートディレクター_中崎透(アーティスト)



浜松市の中心市街地のシンボル「松菱百貨店」の跡地。広さ1400坪の、その広大な敷地で昨年11月、アートイベント「オン・ライン・クロスロード」が開かれた。あらゆる出会いがオンラインで繰り広げられるコロナの時代。中心市街地の空き地に描かれた「クロスロード」の線の上を、数多くの市民が歩き、思い思いに時間を過ごした。主催したのは、浜松市で障害者の通所施設などを運営する認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ。なぜ福祉の法人が中心市街地でアートイベントを？ その壮大な社会実験をレポートしていく。

歌う人あれば歩く人あり。ボールで遊ぶ人あれば昼寝する人もあり。買い物する人、食べる人、飲む人におしゃべりする人。年齢も性別も国籍も、ましてや障害の有無も関係なく、まさにごちゃ混ぜでカオス、そして自由な空間が、浜松市の「ど真ん中」に出現した！

アートイベント「オン・ライン・クロスロード」は、2021年11月3日から7日までの5日間、浜松市中心部の松菱跡地で開かれた。1400坪の敷地の真ん中に描かれた交差点の周囲に飲食ブースや物販ブースなどが置かれ、市民が食事や買い物を楽しんだ。その傍らでは、音楽ライブやトークショーが開かれ、さらにその敷地の中に、卓球台やらベンチやらテントやら、小さな居場所がいくつもつくられた。会場を訪れた人たちは、まさに思い思いに、それぞれの場で、自分が過ごしたいように過ごしていた。

道となる線を引き、交差点をつくる

イベントはまず、参加者が交差点をつくることから始まった。茨城県を拠点に活動するアーティスト、中崎透さんの監修のもと、搬入した砂利を使って参加者が空き地に線を引く。今まで人が立ち入ることすらできなかった場所に突如として生まれた道。そこに、どんな出来事が、出会いが起きていくのだろう。

イベント2日目からは、マルシェ「松菱商店」がオープン。浜松を拠点に活動するクリエイター団体「浜松PPPデザイン」がプロデュースしたマルシェで、自家焙煎の豆を使ったコーヒーショップや多国籍料理店、ハンドメイドのアクセサリーショップなど、30店舗が店を構えた。

11月6日と7日には、二つの音楽ステージ、『風と砂利と音』、『推し☆たん!!』が開催された。障害のある人もない人も、スタッフも一般人も、ミュージシャンもそうでない人も一緒になってバンドを組み、演奏し、自分たちの音楽を市民に届けた。オン・ライン・クロスロードにチケットは要らない。誰でも入ることができて、誰もが好みに過ごすことができた。音楽を聴いて、それを口ずさんでもいい。踊ってもいい。昼寝してたっていい。別の目

的地向かおうと、経路をショートカットするために敷地に入り、交差点を渡るだけの人もいた。ボールで遊んだり、空をまったりと眺めて体を休めたりする子どもたちもいた。

松菱跡地は、文字通り交差点になった。しかしどこか市場のようでもあり、商店街のようにも思えた。人の集まる様子はお祭りの縁日にも思えたり、逆に、何の変哲もない日曜の公園にも見えた。みんな、それぞれやっていることはちがう。けれど、その全員が、その場にいることを楽しみ、それぞれに遊び、時間を過ごしていた。来場客は、5日間で延べ5000人にものぼった。

この場所を開きさえすれば、きっと何かが起こる

イベントを主催したのは、浜松市を拠点に活動する認定NPO法人クリエイティブサポートレッツだ。レッツは、多様な人たちが共生する世界を作ろうと、障害福祉施設の運営やさまざまなアートプロジェクトを行ってきた法人だ。福祉事業所と聞くと、静かな住宅地や周囲を自然に囲まれた場所をイメージする人も多いかもしれないが、レッツは、多くの人が行き交う「まちなか」での場づくりを実践してきた。

レッツにとって、コロナ禍で消えていく街の賑わいは人ごとではなく、スタッフの中に少しずつ「まちなかで何かやりたい」という気持ちが募っていった。そんなとき白羽の矢が立ったのが「松菱跡地」だった。レッツの理事長、久保田翠さんはこう語る。「松菱跡地は市民にとっての象徴的な場所です。入れるなら入ってみたい、中を歩いてみたい、きつとそんな人が多いんじゃないかと感じていました。マルシェやステージをやりたいかっただけではないんです。象徴的な場だからこそ、この場所を開きさえすれば、きつと何かが起きる。ここでなにかをしてみたい人が集まってくれるんじゃないか。そう思っていました」。

ではそこに、いったいなにが生まれたのだろうか。オン・ライン・クロスロードの責任者として運営にあたったレッツのスタッフ、水越雅人さんは、「それぞれの小さな場で、いろいろな『あそび』が生まれていました」と振

り返る。「会場に来ていただいた方、みんながそれぞれに自由にあそんでいたのが印象的でした。あそんだのは、お客さんだけではありません。イベントを提供する側、提供される側という垣根も壊れて、みんながそれぞれにあそぶことができたように感じています。それで思ったんですよ。みんなこんなふうに、街のど真ん中であそびたかったんだって」。

みんな、まちなかで、あそびたかった

中心市街地はとにもかくにも経済を回さなければいけない。そう考えられている。だから、なにを買うにもお金が必要で、すべての店に「これを売り買います」という目的が与えられている。喫茶店ではなにかを注文しなければ居ることすらできないし、ぼーっと音楽を聴いているわけにはいかない。街は決して、すべての人に優しいわけではない。

けれども、オン・ライン・クロスロードでは、私たちは存分にあそぶことができた。なぜそれができたのだろう。空き地があったからだろうか。いや、空き地があったとしても、本当にただの空き地だったら、逆にどう過ごしていいかわからなかったはずだ。ではなぜ……。

おそらく、ここに「交差点」があったからだ。「そこを歩く」という最低限の行為だけが促されていたから、私たちはあそぶことができたのではないか。「こんなふうにあそべ」と指示されるわけでも、逆に何の指示もないわけでもない。たったひとつ。そこに交差点が描かれていたからこそ、私たちはそこを歩こうとしたのだし、歩くうちに他者の存在を感じ、さまざまな居場所ができた。そして、自由なあそびにつながった。

クロスロードが作り出した「あそび」は、そこに人が存在することを許容する。そして、人と人の交流を促す。それはまるで街の原点のようなものだ。わたしたちがここで見つけたもの。それは、これからの街の未来、そのものなのではないか。



なぜいま、中心市街地に「クロスロード」が必要なのか

鈴木 裕矢 さん

浜松PPPデザイン



私たちはもともとまちづくりを掲げた集団で、これまではわりと大きなイベントをやったんですが、つながりのあったレッツさんから「松菱跡地に道をつくるんだけど一緒にやらない？」って誘われて、やばいな、おもしろえじゃんと思って参加させてもらいました。今回、うちのメンバーの大工さんが大きな櫓のようなものを作ってくれました。普段は店舗の改装とかを仕事にしているんですけど、きつと表現したいものがあったんだと思います。「クラフトマンシップ」って言葉があるけど、職人さんってアーティスト気質がある人も多いから、場さえあれば、自由に表現したいって

思う人もいます。それがうまくハマったんでしょうね。

浜松で飲食に関わっている人たちも連絡をくれて、「松菱跡地でなんかやってんの?」「出店していいんだったらやりたい」って声をかけてくれましたし、浜松市で「ペロリ」という名義で動画配信してる、ゴリゴリのビジネス畑の知り合いがいるんだけど、彼とレッツの久保田さんとのトークも企画もできました。レッツのことを別の畑の人に翻訳していくような場も作れましたね。

多くの市民が遊んで、みんなの文化祭みたいな感じでした。こんなふう自由にやっていいんだ、街のど真ん中で遊んでいいんだって、みなさん思ったんじゃないかな。今って、まちの使い方ひとつとっても、決まりきった線路の上に乗せようとするようなやり方が多い気がします。自分で工夫して遊ぼうって感覚が足りないと思うんですよ。

今回も、レッツの障害のあるメンバーさんがたくさん来てくれて、どんなふうにごすの

か見てたら意外とスタッフに怒られたりして、いい意味で雑っていうか、全然普通だなんて。今までは腫れ物じゃないけど、必要以上に丁寧にしないといけないのかなって思ってたんですが、すごく距離が縮まった気がします。そういう場って、やっぱり必要ですよ。

コロナもあって市街地に人が減ってる、だから商業再生だっていう声もあるけど、商業っていうより、なんか音楽が鳴ってるな、なんかガチャガチャやってるなって、そういう人の営みの音や音楽があるから人が集まってくるんだと思います。集まれる場、出会う場さえあれば、表現したい、なんかやりたいって変なやつが、まちには大勢いますから。

鈴木裕矢 すずき・ゆうや

株式会社Arrow 代表取締役。浜松PPPデザイン所属。地方の「何も無い」はほんとうか? 新規事業、商品のブランディングも手掛けるデザイナー。浜松城公園に7000人が集まるLocal Coffee Fesや、浜名湖でDIY合宿するMikka Beatなども開催。

水越 雅人 さん

クリエイティブ
サポートレッツ
支援員



まずシンプルに、いろんな人が来てくれたことがおもしろかったです。ビジネスマン、市役所の職員、若いあんちゃんたち、高齢者、家族づれ…。みなさん「何やってんの?」って感じて覗きに来てくれた感じでした。過ごし方も本当にいろいろで、テントでのんびりする人、卓球やっている人もいれば寝てる人もいて。マルシェを企画してくれた浜松PPPデザインのみなさんも、いい意味で勝手に遊んでくれて、それぞれが過ごしたいように過ごしてくれました。

松菱のそばって飲み屋が多いんですよ。酒好きは楽しめるけど、お酒が飲めない人、お金がない人、子どもや障害者は過ごせないエ

リアだったと思うんです。お金がないと喫茶店にも入れないわけですから。その意味で、まちなかって意外と「過ごせない場所」だよなと感じていました。だから前々から、そうではないまちの過ごし方を考えられたいいなと思って、それで今回のような企画にしたんですが、オン・ライン・クロスロードはおもしろい実験場になった気がします。

設定を一番単純なところまで戻したことが良かったのかもしれませんが。ここではこれをして、こういう風に動いてください、ここでお金を払ってください、というルールや目的を明確に決めちゃうと、合致しない人は排除されますよね。だから、そうじゃない一番単純なところまで巻き戻すっていうか、それが「歩ける道がある」というところだった。そこまで巻き戻せたから、みなさんが自由に、自分たちで過ごし方を考えてくれたんじゃないかと思うんです。

人が道を歩いて、交差すれば、そこからいろんな「過ごし」や「遊び」が生まれるとい

うことを改めて考えさせられました。でも、それができたのも、ここに空き地があったからなんです。空き地という余白がなければ、こんな実験はできなかったわけで。じつは、この場所が「松菱百貨店跡地」と呼ばれるのが嫌だったんですよ。20年ものあいだ、ずっと消費を生み出せ、経済を回せみたいな声が聞こえてくる感じがして。でも、今回のイベントで、「百貨店跡地」から少し解放できた気がするんです。

この空き地は実験場です。なんていうか「まちのもう一つのあり方を考える交差点」みたいな。そう考えると、ここに空き地があったことに大きな意味があったと思いませんか? 空き地にポジティブな意味が与えられて、まちの見え方も変わってくる気がします。

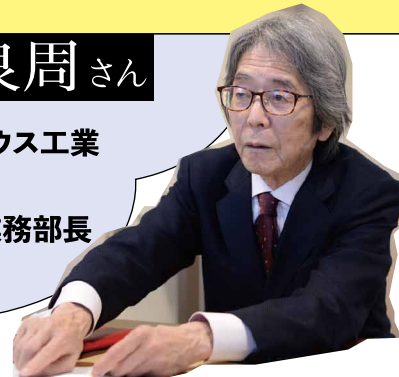
水越雅人 みずこし・まさと

認定NPO法人クリエイティブサポートレッツのスタッフ。障害のある人の活動・居場所・仕事づくりをサポートする就労継続支援B型事業担当。

5日間で、延べ 5,000 人を動員したオン・ライン・クロスロード。イベントに関わった当事者たちは、そこで何を目撃し、何を感じたのだろう。イベントでマルシェを担当した浜松PPPデザインの鈴木裕矢さん、主催したクリエイティブサポートレッツの水越雅人さん、跡地を管理するアサヒハウス工業の高橋良周さん、そして、アートディレクターの中崎透さんの4人にそれぞれ話を聞いた。なぜいま、中心市街地に「クロスロード」が必要なのか。立場も、職業も違うはずの4人がそれぞれに語った。

高橋 良周 さん

アサヒハウス工業
株式会社
取締役 業務部長



レッツの久保田さんとは長い付き合いがありましてね。出会う前は、障害のある人たちの存在を頭の中ではわかってはいたけれど、身近には感じていなかったかもしれません。でも久保田さんたちは、これまでは人の目に触れない郊外で運営されてきた事業を、あえてまちなかでやろうとしている。まちなかに出て健常者と接触させ、社会を変えるんだと。そんな思いに共鳴しました。

松菱跡地では、これまでもイベントは開かれてきました。ただ、これまでは主催者がいて、そこにお客さんが集まるというイベントでした。ところが今回は少し違って、みんなが主

催者という感じでね。跡地の真ん中に道を通したのもよかった。中に入ったことがなかった人たちも、そこを通ることでこんな土地があったんだと知ってもらえたように思います。跡地になって20年になりますから、若い人には松菱百貨店があったという記憶がない人もいでしょう。

これまで長くまちづくりに関わってきましたが、やはり中心市街地には「非日常」というか、お金を払うだけの価値がある場所や商品があつて欲しいと思います。一方で、エコノミストの藻谷浩介さんの言葉を借りれば、百貨店というのは「花」なんです。花を咲かせるには、木を植え、育てていかないとけません。もはや物販だけでは中心市街地の人の流れは増えないでしょう。だから、まちなかに住む人を増やすことも必要です。昼間の人口を増やすためにも、やはりなんらかの業務を行う企業にテナントを貸りていただきたい、とも思います。

ですが、もはや「借りてください」と言うだけでは、不動産は生き残れません。その

テナントでなにをやるのかまで考え、自ら事業をつくる必要があります。弊社も、グループのなかでさまざまな事業を手がけるようになりました。現に、浜松市鍛冶町で高齢者福祉の事業所も経営しています。まちなかは、利便性に富んでいるので、たとえば高齢者のデイサービスのような福祉施設があつても、もちろんいいわけです。

そうしてさまざまな事業を展開していくことで、時間はかかるかもしれませんが、まちなかが多様なものになり、多くの人たちにとって過ごしやすいものになるのではないのでしょうか。松菱の跡地の利用についても、アフターコロナを見据えながら、模索を続けていきたいと思っています。

高橋良周 たかはし・よしかね

不動産コンサルティングマスター。主業務は企画開発全般(分譲マンション、大規模商業開発、市街地再開発)。浜松市街地を中心に14年以前から【楽しく歩けるまちの拠点施設】を創造することをコンセプトに様々な事業を行い、浜松のまちづくりに関与している。

中崎 透 さん

美術家



うスタイルにしました。あとは、レッツの久保田さんから「なにかを組み立てたら片付けないといけないけど、線なら残ってもいい」と言われていたんです。痕跡が残るのはいいな、そこに可能性があるなと感じて、砂利で交差点をつくるアイデアが固まりました。

まちづくりのイベントを期待した人も多かったと思いますが、実際には、通勤通学のために遠回りして人がショートカットするために松菱跡地に入った、というパターンが多かった気がします。でも、それがまたよかった。こういう場に慣れていないためか、振る舞いを悩む感じの人が多く感じましたが、皆さん自分なりに居場所をつくり、そこに落ち着いていく。そういう場を自分でつくるのがいいんですよ。

お店の人も同じで、最初はかなり困惑したんじゃないでしょうか。浜松PPPデザインさんからも「イベントを紹介した店主からポカんとされた」なんて話を聞きました。でも、開催できたことで多くの人が「こういうことか!」

と感じてくれたはず。次回参加する人はきっと増えると思います。

ぼく個人は郊外で育ったので、駅前や中心市街地にあんまり愛着がないんです。でも、拠点にしている水戸に来て12.3年になると、これから芸術をやりたいって若い人が訪ねてきたりするんです。地方都市って、東京と違って田舎を出たらすぐに仕事しなくちゃダメだと思われているように感じます。だからこそ、無駄にグダグダできる社会のあり方を示したいし、それは美術とか音楽とか演劇、文学の役割でもあると思います。レッツがやろうとしていることもまさにそう。マイノリティが関わっているいろいろな分野のメタファーになっている。そんな気がします。

中崎透 なかざき・とおる

美術家。武蔵野美術大学大学院造形研究科博士後期課程満期単位取得退学。現在、茨城県水戸市を拠点に活動。言葉やイメージといった共通認識の中に生じるズレをテーマに自然体でゆるやかな手法を使って、形式を特定せず制作を展開している。



！
レッツのスタッフに聞いた

人と人の交差から、すべては始まる

イベント開催期間中、レッツが運営する障害福祉施設のメンバーの「過ごし」を任せられた高林さんは、こんなシーンが記憶に残っている。知的障害のある俊さんというメンバーがいる。街の風景を眺めて過ごすのが好きで、いつも「街の音鑑賞中」というベストを着ている。俊さんを見た初老の男性が「あの子は何をしているんだい？」と声をかけてきた。高林さんが事情を説明すると、その男性は「いろんな人がいるもんだなあ」と納得し、なんとすべての日に足を運んでくれ、俊さんたちを見守ってくれたそうだ。

別の日。俊さんが空き地のフェンス越しに街を眺めていると、向こうから小学生の集団が歩いてきた。小学生たちは次々に、そして元気よく「こんにちは」と挨拶していく。小学生たちは俊さんに出会う。俊さんもまた子どもたちに出会う。ただの「挨拶」だけれど、そんな光景がよかったと高林さんは振り返った。

会場ではバドミントン大会も開かれた。レッツのメンバーの中にバドミントンが大好きな女

性がいて、たまたま通りがかった人を誘ってバドミントンをしたのだ。かたや、レッツのメンバー、久保田壮さんは会場を歩き回っていた。自分の欲求を言葉では説明できない壮さんだが、いろいろな刺激があったからだろう。その日はなかなか帰りがらなかったという。彼らが自由に進んでいくところに、次々に「人と人の交差」が生まれた。

スタッフには「なにか起きたら大変だ」とヒリヒリした空気もあったそうだ。だが、高林さんは「行ったら行ったでなんとかなる」と思っていた。そうしてスタッフも現場に踏みとどまり、メンバーたちは、それぞれ自由に過ごすことができた。だからこそ、多くの人たちが交差し、文字通り「オン・ライン」に、「クロスロード」（橋がかかるような出会い）が生まれたのだ。

一期一会が生み出すパワー

音楽イベントで音響を担当し、自らパフォーマンスとしてライブにも参加したマッスルNTT

さんに印象的な場面を聞いてみると、「岸くんのパブリカ」を挙げてくれた。お昼のライブで、市内の音楽教室に通う児童たちが『パブリカ』に乗せてダンスを披露したのだが、ステージに上がってみんなのダンスをリードしたのが、レッツのメンバー、岸さんだった。

この日が初めてのセッションだったが、岸さんも子どもたちもこの日のために練習を重ねてきたそうだ。踊り終わったあと、子どもたちも保護者たちも、目に涙を浮かべていたという。マッスルNTTさんは「みんながこの日のためにそれぞれ練習していたのもあるけど、やっぱりそれぞれがぶつかる、その一期一会が心を動かしたんだと思う」と語る。

それからマッスルNTTさんは「そこに訪れる人たちに共通した『思惑』があると、関わりが生まれやすくなるんじゃないか」という話もしていた。オン・ライン・クロスロードのあと、浜松城で開催された「コーヒーフェス」に、マッスルNTTさんやメンバーが結成したバンドが招かれた。コーヒーフェスは福祉事業所のイベントではない。フェス側に、音楽

オン・ライン・クロスロードの開催期間中、会場にはさまざまな「場」が生まれていた。ライブ会場、卓球台にテント、マルシェ。さらには、会場を訪れた人たちも、それぞれに、休憩したり、歌ったり、歩いたりして、小さな場を作り出していた。それらの場では、どんな時間が流れていたのだろう。イベントの場づくりに関わった3人のスタッフに話を聞いた。彼らが語ったのは、だれもがいられる、だれもがいていい、そんな場の必要性。それは、現代の中心市街地に最も足りないものかもしれない。

を盛り上げたいという思惑があったからこそ、それが接点になり、レッツとつながったのだ。

ヤバイ奴らの交差、出会い

音楽イベント「風と砂利と音」を担当した曾布川さんは、ある風景が強く印象に残っている。イベント最終日。ステージでは、静岡県富士宮市のバンド「inari」と、レッツのメンバーであるカワちゃんによる演奏が繰り広げられていた。地元でも定評のあるinariの即興的な演奏に合わせ、カワちゃんが「オッオッオッ！」と叫び声を上げる、そんなパフォーマンスだった。

かつて市内のライブハウスの運営にも関わっていた曾布川さん。カワちゃんの声を外部のライブでも通用する“デスボイス”だったと評する。だがそれは、普通のデスボイスではなかった。自由で、切実で、アバンギャルドで、そして全力だった。だからその声がバンドのメンバーにも、観客にも伝わったのだ。曾布川さんは言う。「自分を解放して全員が

いい演奏ができたのは、inariのみんなとカワちゃんが反応し合って、ともに同じ時間をつくることができたからだと思います。ドラムの男の子が、なに叩いてもいいって楽しい！って言っていました。カワちゃんの声に反応して自分も叩く。そして、叩くうちにカワちゃんも反応する。そうして反応し合って、ともに時間をクリエイティブしていくことで『出会い』になるんだと、そのパフォーマンスを見て改めて思いました」。

クロスロードの上で表現者が交差し、出会う。なにが起きるかはわからない。けれど、結果や目的を設定せず、表現者たちを信頼し、人と人の出会いが生まれる瞬間を待つ。それが、成功の鍵だったのかもしれない。

中心市街地が見落としてきた福祉

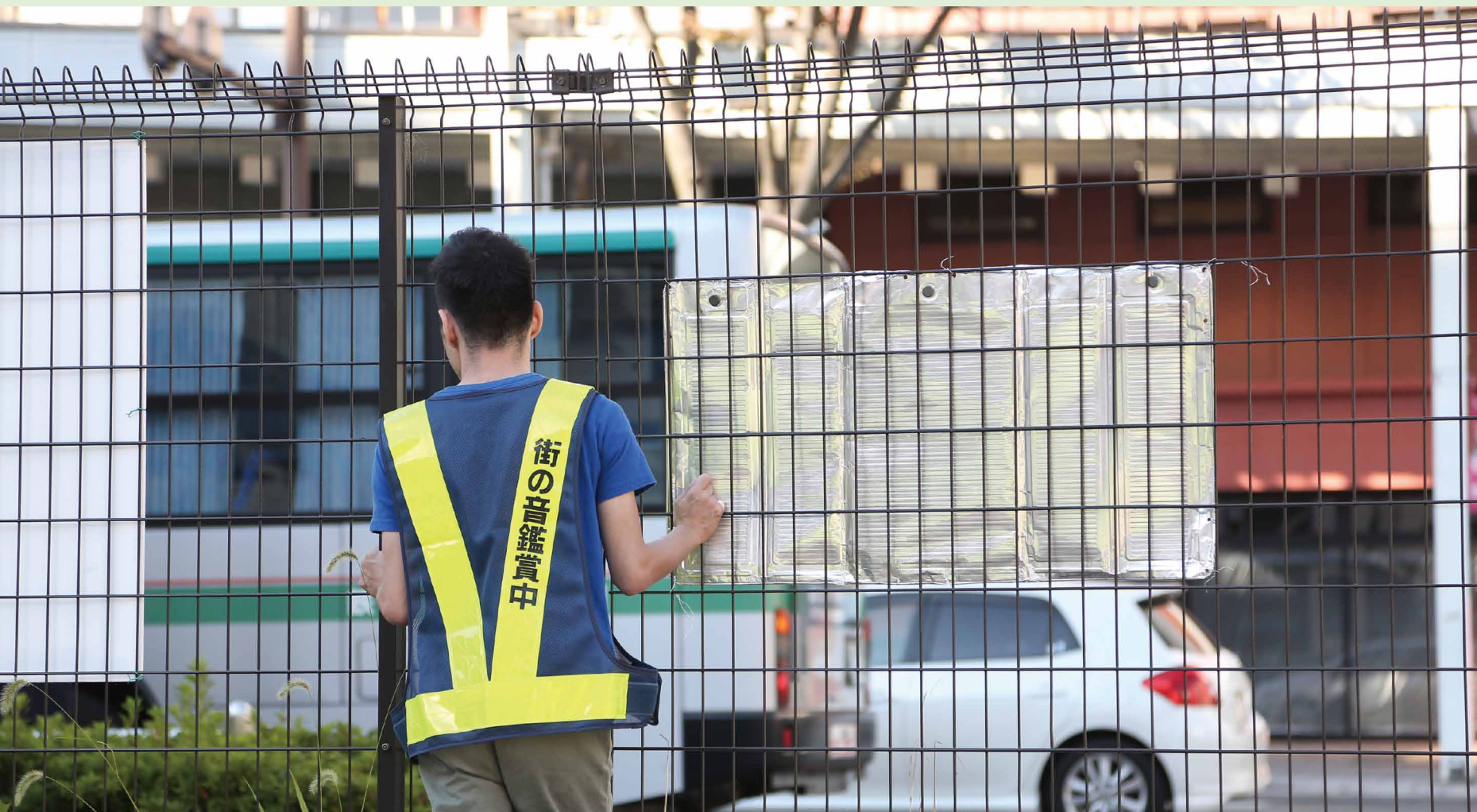
オン・ライン・クロスロードで起きたこと。それは「人と人の交差」だ。けれど、ただ交わったわけではない。その交差がやたらに楽しそうなのだ。なぜ、楽しい交差が生まれたのか。

それは、障害のある人たちが自由にいられたからではないだろうか。障害のある人たちが楽しくいられる場所は、当然、障害のない人にとっても自由で、楽しい空間になり得る。来場者は「だれも排除されない場所」の開放感や豊かさを受け取っていくのだ。

みんながひとつのルールに従ってあそぶのではない。みんながバラバラにあそぶからこそ、そこを訪れた人たちは「自分もあそんでいる」と思え、だれもが自由に、それぞれの「思惑」で、自分なりの居場所を見つけることができるのだろう。レッツは、その「起点」をつくらうとした。人が出会い、交差するという起点をだ。

だからこそ、これまでの中心市街地が見落としてきたものにも思い至った。だれもがいられる。だれもがいていい。そんな公共の福祉を、中心市街地は実現してきたのだろうか。会場が浜松の中心だったからこそ、オン・ライン・クロスロードは、中心市街地と福祉について考える余白も作り出していたのではないだろうか。

文・小松理度

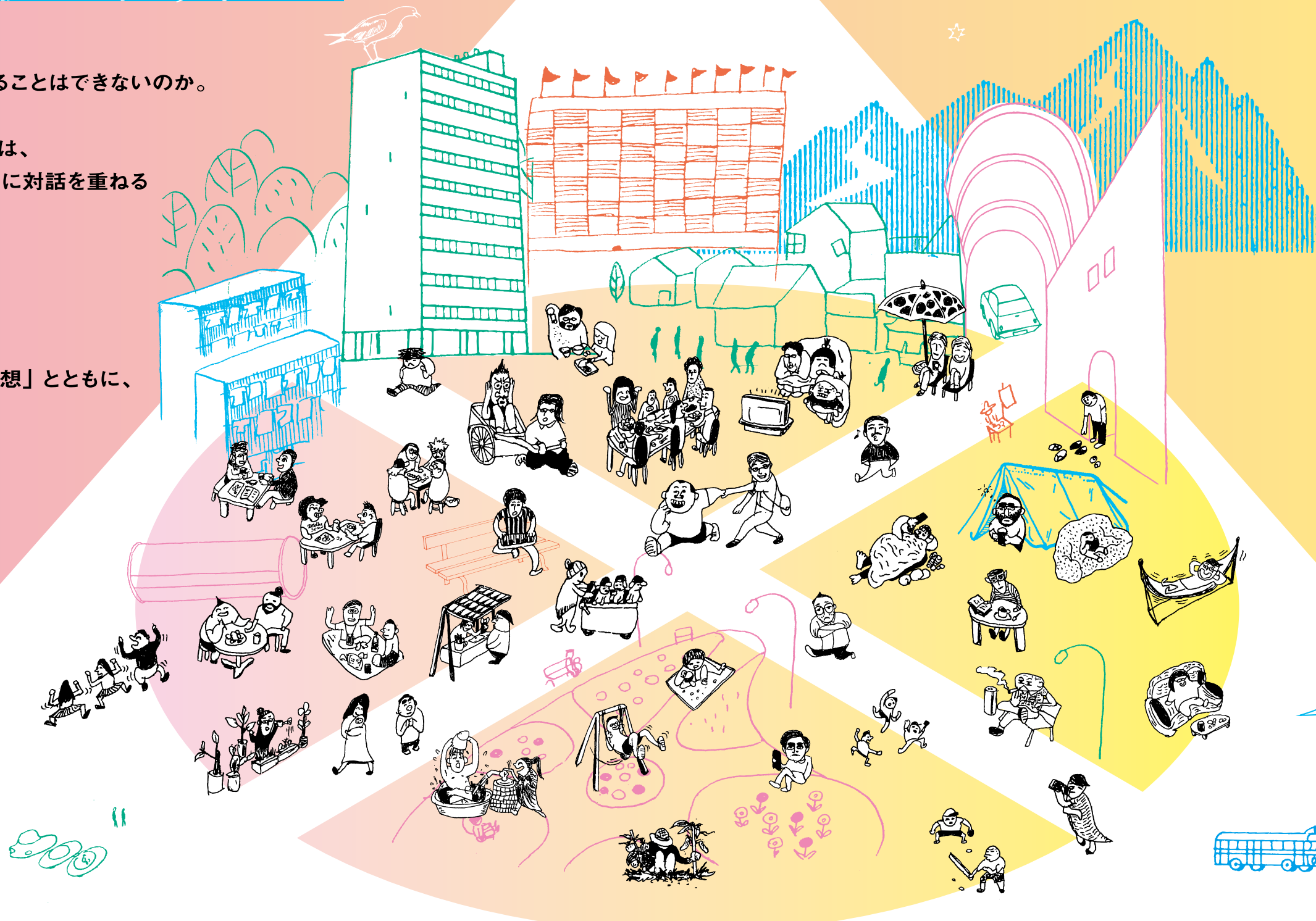


浜松ちまた会議の取り組み

郊外ではなく、まちなかに、
だれもが自分らしくいられる生活圏をつくることはできないのか。

2021年度、クリエイティブサポートレッツは、
福祉とまちづくりの担い手が連携し、ともに対話を重ねる
「浜松ちまた会議」を開催し、
新たなまちづくりのビジョンを考えてきた。

活動の末に誕生したのが、
3箇条からなる「浜松ちまたビジョン」だ。
ビジョンを支える「ネイバーフッドシティ構想」とともに、
このページで詳しく紹介していきたい。



コロナ禍で衰退する中心市街地で、 新しい動きが始まる

認定NPO法人クリエイティブサポートレッツは浜松の中心市街地連尺町に拠点を構え、障害のある人の福祉施設やシェアハウス・ゲストハウスの運営、そして文化事業などをおこなっている。そしてコロナ禍でも1日も休むことなく営業を続け、日々空き家が増え、衰退していく浜松の街の様相を目の当たりにしてきた。

2020年、廃れゆく中心市街地に対し、何かアクションが起こせないかと模索を始めた。そこで、中心市街地に拠点を構えるさまざまな

職種の団体・個人に街の課題や未来についてヒアリングをした。そこでわかったのは、どの団体も今の商業中心の街の在り方に限界を感じていること。さらに、次世代のビジネスモデルとして、人と人が集うコミュニティづくりや拠点づくりを企業自らが取り組み始めていることだった。この街では今、商業だけではない「人に注目した新しい街」の模索が民間側から始まっていたのだ。

世界で進む「ネイバーフッドシティ」

さらに世界では、物理的豊かさだけではなく、自分たちにとっての幸せ (well-being)

を追求し、自分の生活に大切なものを徒歩15分圏内につくる「ネイバーフッドシティ」を目指す動きが加速している。ネイバーフッドとは、直訳すると「隣人・ご近所」のことだ。日本語で「ご近所」と聞くと自治会、町内会のような役割が決まった集団を思い起こすが、ここでいう「ネイバーフッド」とはもう少し多くの意味を含んでいる。徒歩15分圏内のエリアに必要なのは、勤務先や公園といった設備だけではなく、自分が安心して暮らせる関係性や居場所も含まれている。そしてその担い手は、行政だけではなく、民間企業や市民団体も、さらに個人も含まれるのである。

まちづくりと福祉の合流点

「人に注目した新しい街」を考えることや、自分達にとっての幸せ (wellbeing) を追求することは、まさに、「福祉」の領域であると私たちは考えた。本来、「福祉」とは「福祉サービス」のことだけを指す言葉ではない。「人」に重きを置き、人々の生活や暮らしを支え、社会全体の幸せを追求することが「福祉」なのだ。その意味で、浜松の市民側から始まった新しい動きや、世界的に広がる「ネイバーフッドシティ」は「まちづくり」と「福祉」の合流点であるといえる。まさに、「まちづくりを考えたら、福祉にたどりついた」のだ。

浜松ちまた会議の誕生

そこで生まれたのが「浜松ちまた会議」である。「浜松ちまた会議」は、福祉、医療、建築、金融、NPOなどさまざまな職種の団体・個人たちで構成されるネットワークだ。約30団体が繋がり、この一年間、それぞれの活動紹介や、有識者を招いた勉強会、派生事業を検討する分科会、シンポジウムなどを展開してきた。浜松市内で活動している団体同士ではあるが、お互いに初めて知ることが多く、特にまちづくりやビジネスの分野の人たちが福祉分野の活動に自分ごととして関心を示してくれたことは大きな収穫だった。

福祉を軸にしたネイバーフッドシティ

「浜松ちまた会議」の会議の目的は「福祉を軸にしたネイバーフッドシティ構想」の実現である。従来のまちづくりがハコ・モノ中心なのに対して、「浜松ちまた会議」は、「人」つまり「個人」に重きを置く。そして市民自らの手で、自分のつくりたい街を考え、徒歩15分圏内に誰もが安心して暮らし、活動できる地域づくりを目指している。それが、「福祉を軸にしたネイバーフッドシティ」の姿だ。そして今後このモデルが、浜松のみならず、新しいまちづくりのモデルとして広がることを期待している。

福祉を軸にしたネイバーフッドシティ構想 浜松ちまたビジョン

- 1 **街は個人によってつくられる**
街づくりは行政や特定の為政者だけが
行うものではなく市民が行う
- 2 **個人と個人が出会う「ちまた」をつくる**
私たちの考える「ちまた」とは、
親愛なる隣人がいる生活・活動圏
- 3 **「ちまた」が集まると、街が生まれる**
多様な「ちまた」が集まれば、街は面白くなる



「ちまた」をつくること それは「福祉」ではないか

クリエイティブサポートレッツでは、2021年度、「まち」と「福祉」について考える「浜松ちまた会議」という取り組みを進めてきた。レッツを中心に、浜松市でまちづくりに関わる複数の団体がネットワークをつくり、意見交換や勉強会など通じて連携しようというものだ。

中心市街地の活性化について、企業や店舗など経済団体が中心になるケースは全国で見られるけれど、福祉を中心にまちづくりが語られるのは珍しい。福祉施設はたいてい郊外につくられるから、中心市街地のまちづくりについて考える場にすら呼ばれないことがほとんどだからだ。では、その「ちまた会議」では、どのような議論が繰り広げられてきたのだろうか。そしてその議論は、まちなかのステークホルダーに、どのような影響や変化をもたらしてきたのだろうか。



建築家が見る、中心市街地の寛容性

まず、ちまた会議が昨年9月に行ったプロジェクト「創造?!妄想?!レッツ新社屋に新しい街を作る?」に参加した、建築家の辻琢磨さんに話を聞いた。辻さんは、浜松市郊外に自宅兼事務所を構えつつ国内外で活動する建築家だが、郊外の住宅地に住んでいるからこそ、まちなかのメリットも見えてくると語る。

「住宅地ってけっこう排他的なところがあって。たとえばレッツの皆さんみたいに、障害のある人が集団で散歩していたら、驚かれて警察に通報がいくかもしれません。その点、中心市街地は多様な人がいますし、あまり他者に関心がないのでみんな気にしません。まちなかは交通の便もいいし、徒歩圏内いろいろなものが揃います。その意味で、ま

ちなかというのはもともと寛容なんだと思います。住宅を設計する時、南向きで日当たりのいい場所におじいちゃん、おばあちゃんのお部屋をつくるのがよくありますが、それと同じで、何かしらのハンデのある人たちに、まちなかの寛容さを享受してもらいたいと思います」。



しかしその一方で、寛容であるはずのまちなかには、ぼくたちはなかなか関わる事ができない。辻さんも「まちなかには『消費する』以外の関わりがない」と語る。そこで必要なのは、消費者という関係以外の、「主体的にまちづくりに関われるような場」だと辻さんは言う。

消費する以外の関わり、主体的な関わりとは、具体的にどんな関わりだろう。それは、辻さんの言葉を借りれば、「なにかの技術や価値を交換し合えるような関係」だ。たとえば、道具を貸し借りしたり、自分の得意なことや、うまくできることで誰かの困りごとに対処し合う関係。そこでは、自分はなにかを提供する側にも回るし、提供される側にも回り得る。現在のような「消費する」という単一方向だけではない。

辻さんが提起するのは、お互いに顔の見える関係があるからこそ可能な関わりだ。それは言い換えれば、「近隣のネイバーフッドコミュニティ」とも言える。互いに顔が見え、困りごとを言い合えて、なにかと誰かを貸し借りしながら主体的に地域と関われる。住宅地では難しいのだとすれば、それは「まちなか」でこそ膨らむ関係性なのかもしれない。



人それぞれの凸と凹を認め合える地域を

ちまた会議には福祉の担い手も加わっている。NPO法人「遠州精神保健福祉をすすめる市民の会（E-JAN）」の代表理事を務める大場義貴さんもそのひとりだ。近年は、特に若い世代の引きこもりや、発達障害や精神障害などのある若者たちへの支援に力を入れてきた。

大場さんは「子どもや若者が安心していられる場は、家庭や学校、地域から失われ、デジタル空間の中だけになっている」としたうえで、「人それぞれが持つ凸凹と、地域が持つ課題という意味での凸凹を、削って平らにするのではなく、まずは自分や他者の凸凹を認め合い、地域の凸凹をも解決していく場が必要だ」と語る。

課題だらけの現代社会。高齢者、障害者だけでなく、子ども、若者、子育て世代も多くの課題を抱えている。さらにこのコロナ禍では、障害の有無に関係なく仕事や居場所を奪われた人も少なくないだろう。世代や分野を越えて支え合っていかなければ、その人らしい暮らしを守ることはできない。大場さんのそんな危機感は、だれもが感じるものだろう。



浜松ちまたビジョンは、浜松市内のまちづくりの担い手と、福祉の担い手の議論から生み出された。しかし、まちなかが持つ寛容性を引き出し、だれもが暮らしやすく、だれも排除されず、自分のことを理解してくれている人が暮らす都市モデルなんて、ほんとうに可能なのだろうか。「ちまた会議」に関わった3人の実践者の言葉から、ビジョンが生まれた思考のプロセスを紐解いていきたい。実践者が語ったのは、意外にも、まちづくりと福祉の親和性の高さだった。

鍵を握るのは、「福祉におけるまちづくり」と「地域経済におけるまちづくり」とを融合していくことだと大場さんは語る。前者を「個人を中心に課題を捉える活動」とすれば、後者は「地域全体の課題解決のための活動」と定義できるだろうか。両者の担い手が、お互いの困りごとやリソースを持ち寄り、連携を図る。そこには、まさに先ほど辻さんが言及したような「主体的な関わり」が立ち上がってくるだろう。

大場さんの頭の中には、いま、こんなアイデアがある。「いろいろな人が出会い、学び合える場として『なんでもかんでも凸凹大学』というのがあるといいな、と考えています。当事者や支援者だけでなく、家族やボランティア、専門家や行政、企業、さらには研究者なども巻き込んで、互いに学び合うような場ができないものでしょうか。多様な人たちが、気軽に、そして負担なく集まれる。それを可能にするのが「まちなか」なのではないだろうか。

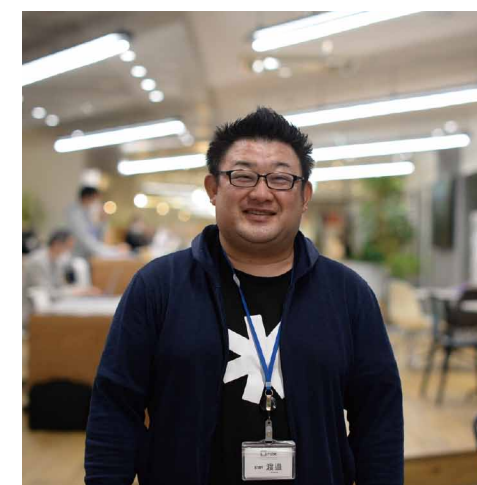


多様な人に出会えることが、まちの強み

「自分はビジネスの側の人間なので、最初は福祉と聞いてもピンときませんでした。議論に交ざるうち、こういう考えもあるんだなとわかってきました」。

そう語るのは、浜松市のまちなかでスタートアップのコワーキングスペース「FUSE」のマネジメントに関わる渡邊迅人さんだ。FUSEは、浜松いわた信用金庫が運営するスペースで、起業家や経営者、開発部門の技術者などに対してさまざまなサービス・支援を行っている。そこで生まれる新たなビジネスには、当然収益性・経済的合理性も追い求められる。「自分はビジネスの側の人間」と渡邊さんが立場を明確にするのも、福祉と経済が、

あたかも「水と油」のように感じられているからかもしれない。

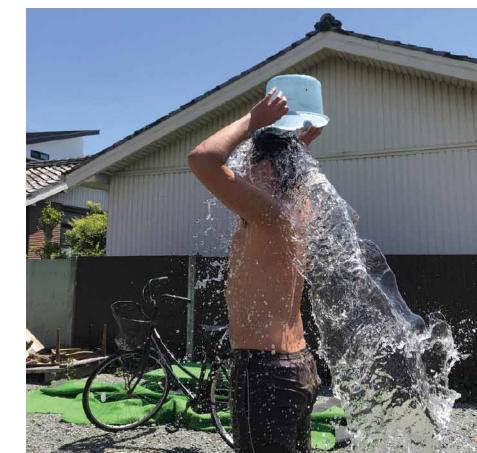


しかし一方で、渡邊さんはこんなことも語っている。「高齢者にとって働きやすい職場は、当然女性や若い世代にとっても働きやすい職場になりますし、だれでも気軽に使える商品が開発できたら、それはみんなにとってありがたい商品になるはず。また、FUSEがまちなかにあるのは、圧倒的にまちなかのほうが集まりやすいからです。多様な人たちが共存するところにシナジーも生まれます。ビジネスを立ち上げるとか、経済を生み出す以前に、多様な人に出会える場が必要で、それこそが、まちの大きなメリットではないでしょうか」



渡邊さんは「多様な人に出会える場」として、まちなかに期待を寄せていた。多様な人たちが集まり、便利で快適で、寛容で、徒歩圏内にいろいろなものが揃う。だからこそ中心市街地は、福祉の担い手にとっても、ビジネス・まちづくりの担い手にとっても魅力的な地であり続けている。福祉とまちづくりの出会い。それは、必然だったのかもしれない。渡邊さんの語る言葉は、決して福祉の対極

にあるものではなかった。むしろ、多様な人たちが交差し、出会うことで生まれるものに期待するというのは、「ちまた」の概念にも共通するものだ。それに、FUSEは、すでに数多くの起業支援を行ってきた。なにかの困難を抱えている人たちを支え、その弱さを受け止め、当事者に伴走しながら、やりたいことをともに実現していく。その活動はすでに「福祉」を含んでいるのではないだろうか。



辻琢磨 つじ・たくま

建築家

1986年浜松市生まれ。横浜国立大学建設学建築学コース卒。2011年に403architecture [dajiba] を設立。2017年には辻琢磨建築企画事務所を設立。現在、名古屋造形大学特任講師、渡辺隆建築設計事務所非常勤職員。2014年「富塚の天井」にて第30回吉岡賞受賞。2016年ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展日本館にて審査員特別表彰。

大場 義貴 おおば・よしたか

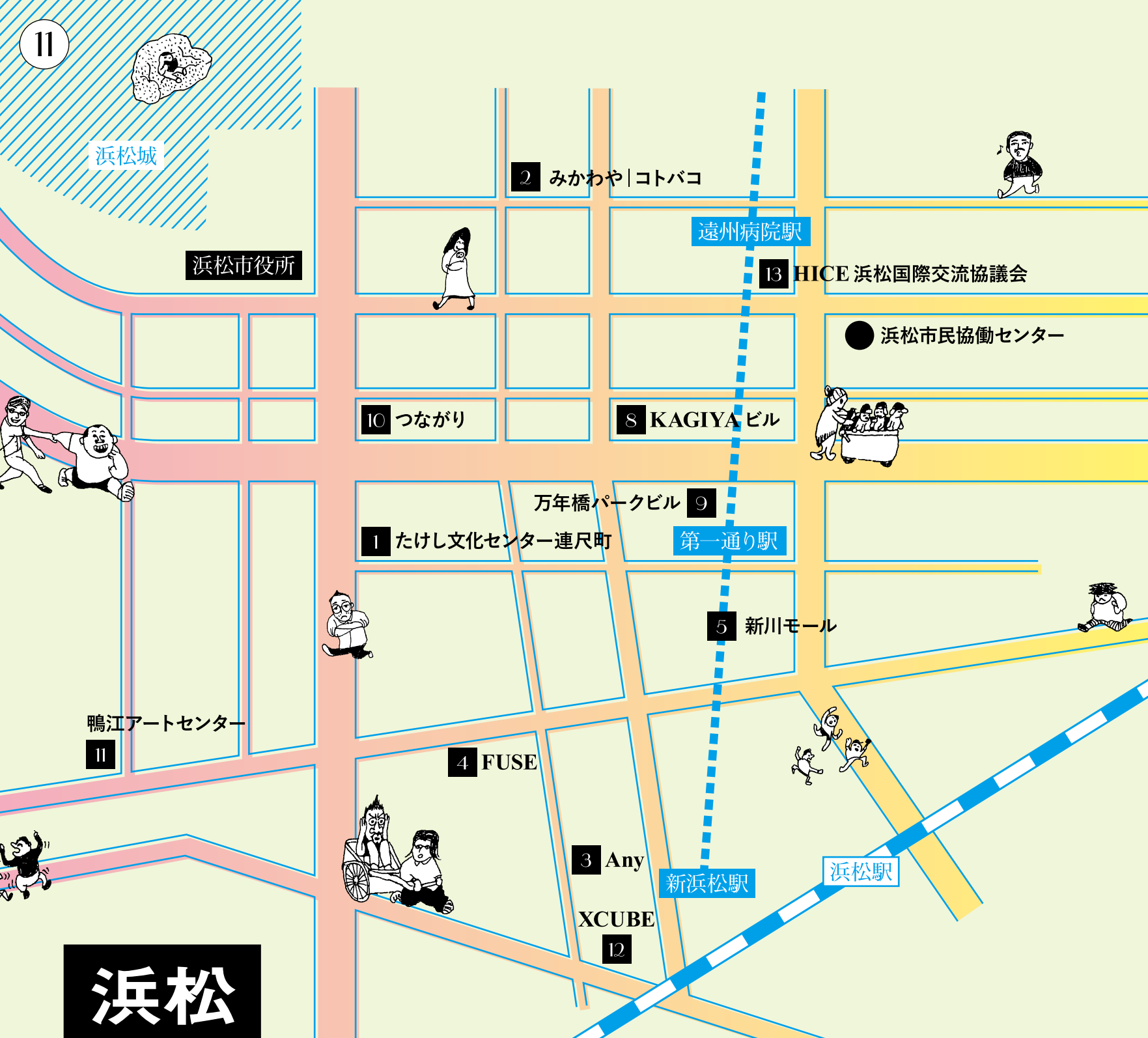
NPO法人 遠州精神保健福祉をすすめる市民の会 (E-JAN) 代表理事

袋井市出身。臨床心理士、精神保健福祉士、聖隷クリストファー大学准教授。大学で教壇に立ちながら、精神障がい者を支えるNPOの代表として活動。また、不登校児童生徒支援、ひきこもり家族支援、自殺対策に関する研究、思春期メンタルヘルス支援に関する研究、若者の社会的孤立に関する研究にも取り組んでいる。

渡邊 迅人 わたなべ・はやと

浜松いわた信用金庫 新産業創造室 副調査役

1979年浜松市生まれ。近畿大学商学部卒。2002年に浜松信用金庫入庫。地方創生戦略推進センター、スタンフォード大学客員研究員などを経て、現在、法人営業部新産業創造室の副調査役兼 FUSE のマネージャーを務める。



浜松

ネイバーフッドマップ

HAMAMATSU NEIGHBORHOOD MAP

自分が住んでいる場所から徒歩15分圏内に必要なものがそろい、そこに暮らすみんながそれぞれに力を出し合えるよう中心市街地。それが「ネイバーフッドシティ」だ。福祉やまちづくりの担い手たちが同じテーブルで中心市街地のあり方を探ってきた浜松市ではいま、リアルな「ネイバーフッド」が形づくられている。その担い手たちを、ネイバーフッドマップで一挙紹介。あなたの居場所も、きっとこの中にある。

1 たけし文化センター連尺町



レッツが運営するオルタナティブスペース。1、2階にはだれでも遊びに来れる福祉施設「アルス・ノヴァ」や音楽スタジオが、3階にはゲストハウスとシェアハウスが併設されている。福祉を軸にしたネイバーフッドシティ構想「浜松ちまた会議」の言い出しっぺ。
浜松市中区連尺町314-30 / TEL: 053-451-1355
<http://cslets.net/>

2 みかわや|コトバコ



2018年の「リノベーションスクール」を起点に生まれた。古民家をリノベーションして作られた複合施設で、製本所、野菜市、家づくり相談、お菓子、コーヒー、プログラミング教室といった8つの事業体が、空間をゆるやかにシェアしながら活動している。
浜松市中区尾張町 126-1
<https://mikawayama-kotobako.com/>

3 Any (エニイ)



浜松まちなかにぎわい協議会が運営するコミュニティスペース。JR浜松駅から徒歩3分とアクセスがよく、コワーキングスペース、レンタルスペースとして活用できるほか、さまざまなセミナーを開催。地元の企業や創業者と交流を持てる。
浜松市中区千歳町 91-1 / TEL: 053-459-4320
<https://any-h.jp/company>

4 FUSE Co-Startup Space&Community



浜松いわた信用金庫が運営する会員制コ・スタートアップスペース。ザザシティ浜松中央館の地下2000平米の大規模なスペースを活用して、2020年にプレオープン。地元の企業人や、クリエイター、学生などが集う。
浜松市中区鍛冶町100-1 ザザシティ浜松中央館B1F
<https://hamamatsu-iwata.jp/business/sogyo/fusehamamatsu>

5 新川モール



2022年4月にオープンする遠州鉄道第一通り駅高架下の公共空間。株式会社HACKが指定管理を受け、移動販売者やまちの社員食堂など「Local Trust Hub(街の小さな信頼がたくさん集まる場)」を目指す。さまざまなシーンでの活用が期待される。
浜松市中区田町 遠州鉄道高架下
<https://hack-hamamatsu.com/>

6 遠州精神保健福祉をすすめる市民の会 (E-JAN)

専門職だけでなく、市民ボランティアや精神科ユーザーなども会の運営に参加する形で地域に向けた理解啓発活動やボランティアによるサロン活動を続ける。若者のひきこもり、就労支援などに力を入れている。
浜松市中区曳馬 2-8-19 / TEL: 053-461-6045
<https://npo-e-jan.com> ※地図外に立地

7 一般社団法人 みらいTALK

浜松市及び近隣の地域に住む全ての子どもにとってより良い未来、地域社会を築くことを目的とする活動体。生活困窮家庭の子どもたちの学習支援のみならず、移動支援、食事支援、みらいTALKメンバーによる相談支援、生活支援などを包括的に行っている。
<https://miraitalk.net> ※地図外に立地

8 KAGIYAビル

創造力豊かなクリエイターやデザイナーが集まる文化発信複合ビル。ゆりの木通り沿いに位置し、懐かしい雰囲気といい具合に融け合った新しい感性が、訪れる人を惹きつけている。
浜松市中区田町 229-13

9 万年橋パークビル

駐車場を中心にさまざまな店舗やイベントが行われる複合ビル。1階にセミナースペース「黒板とキッチン」があり、大学生や市民、さまざまな人たちの居場所になっている。
浜松市中区田町 327-24
TEL: 053-451-7011

10 浜松市生活自立相談支援センターつながり

社会福祉法人聖隷福祉事業団が運営する相談支援センター。さまざまな人たちの生活、就労、学習に関する支援を行う。社会福祉士、精神保健福祉士、ジョブコーチ等の資格を持つ職員が相談に応じてくれる。
浜松市中区元城町218-26 聖隷ビル1階
TEL: 053-546-0500

11 鴨江アートセンター

創造都市・浜松の拠点的作用を担う公共文化施設。1928年築の歴史的建造物を使い、創造都市・浜松の拠点的作用を担う公共文化施設として2013年11月に開館。年間を通じてさまざまな企画を行っている。
浜松市中区鴨江町1 / TEL: 053-458-5360
<https://kamoartcenter.org/>

12 XCUBE

アサヒグループが運営する静岡県内初の体験型VR・ARアミューズメント施設。子どもたちが遊べるデジタル砂場などもあり、年齢を問わずに利用できる。授乳室も完備されているので子連れ世帯も安心だ。
浜松市中区鍛冶町1-2 かじ町プラザ3階
TEL: 053-488-7666 / <https://xcube.jp>

13 HICE 浜松国際交流協会

浜松の多文化共生・国際交流に関する情報を発信している団体。「中部協働センター」と「浜松文芸館」を併設した文化複合施設「クリエイティブ浜松(浜松市文化コミュニティセンター)」のなかに事務所を構える。
浜松市中区早馬町2-1 / TEL: 053-458-2170
<https://www.hi-hice.jp/ja/>

FORUM

浜松ちまた会議

シンポジウム

2022

「浜松ちまた会議」の集大成となるシンポジウム「まちづくりを考えたら、福祉にたどりついた」が、2022年3月、浜松市の鴨江アートセンターで開催された。ゲストは、日本財団の竹村利道さん。建築家の辻琢磨さん。厚生労働省の本後健さんも加わり大激論。定員80名を超える参加者が集い、YouTubeにアップした動画再生回数はすでに1000回を超えた。いまだ多くの関心を集める議論の一部を、ここで紹介する。



この日のシンポジウムは、午後1時から午後6時半まで、なんと5時間越えの長丁場。前半は、レッツの活動について福祉的な面から報告・検討を重ね、後半は、ちまた会議に参加した関連6団体の実例報告があり、その議論を踏まえたくえでシンポジウムに入った。本来のゲスト以外にも、実例報告に参加した人たちも議論に加わるなど大いに盛り上がり、まちづくりと福祉について、新たな哲学が生まれたシンポジウムとなった。

翠：今日は、さまざまな団体の皆さんに、本当にたくさん事例を紹介してもらいましたが、皆さんに共通するのは、それぞれが自分たちでコミュニティを作り出そうとしていることだと感じました。たまにはふざけたり、面白がっていないと深刻な人ばかりになってしまう。やっぱり福祉業界のように深刻じゃダメなんです。面倒なトラブルも含めて、困りごとを抱えた人と一緒に暮らしていくにはどうしたらいいか。それを考えるために、ちまた会議を一年間やってきました。

竹村：ぼくらが今日議論してきた福祉って、本来私たちの身近にあるものはずなんです。でもどこかで介護保険ができたりサービスが生まれたりするうち、スペシャリストの世界になってしまった。福祉の「福」は「ものの豊かさ」を指す言葉だし、福祉の「社」は訓読みすると「社（さいわい）」と読みます。物が豊かで幸せに生きようとする、まさにその姿こそ福祉なんです。つまり、人の幸せをみんなで考えようすることは福祉なんです。まちづくりだってそう。

本後：たしかに、福祉の世界って制度として

できあがってしまっているものですね。中だけで完結できてしまう。だから、自分の暮らすまちの中に福祉の事業所があるのに誰も知らないという状況になっているのかもしれない。多分、都市部も地方も一緒に、個と個がずっと個であり続ける以上、個でしかない。自分たちをどうやって地域の中に見せていくか。その手段を持たないといけないのだと思います。

辻：市街地と福祉、という文脈で話すと、いま、いろいろな福祉施設が郊外の市街地調整区域に追いやられていますよね。移動に困難のある人、動けない人がどんどん郊外に遠ざかっています。逆に市街地は商業区域なのでなんでも建てられますし、公共サービスも充実しています。そういう恵まれた場所に、移動に困難のある人たちを置いたほうが理に適ってるんじゃないかと思えます。市街地と福祉には、ポジティブな可能性があると思えます。

竹村：まちの寛容度はめっちゃ高いですよ。ちょっとくらい変なやつがいても誰も気にしませんから。ただ、我々のような福祉の担い手が進出するときには、できるだけ多様な人がみんな出ていくのがいい。障害のある人も行く、引きこもりも行く、高齢者も子どもも貧困世帯も、みんなで行くんです。関わりの作り方は事実婚です。福祉の人とはどちらかというと丁寧に事業説明をして、地域の人たちに許可を求めるようなところあるでしょう？

そうじゃなくて事実婚ですよ(笑)。でもね、あえてまちの側に立つと、「あなたたちが来ると、なんの恩恵があるんですか」って聞きたくなる。そういう視点を頭に入れてコミュニケーションしていかないと成立しません。それと、あえて言うんだけど、福祉サイドの人たちのクリエイティブな人に対するコミュニケーション能力が決定的に欠けてると思う。

小松：ああ、わかります。ビジネスの人たちって想像以上に課題解決の感覚が強いですよね。でも、そういうビジネスの人たちが集まるような環境で福祉の人を見たことがないんですよ。意外と地域の中で、似たような課題にぶち当たってるかもしれないし、ほんとはコラボできるはずなのに、つながっていないのはもったいないですよ。

竹村：ビジネスの人たちと一緒にやるならば、福祉の文脈ではなく「ビジネスの手法で解決できんんじゃない？」っていうクリエイティブ

なやりとりが必要で、福祉の人たちとまちづくりの人たちの間に入ってコミュニケーションのサポートするのがレッツの役割なんだと思います。

翠：福祉の人たちってアイデアを考えるのはあんまり得意じゃない。だから、ビジネスの人、たとえば不動産の人とかが近づいてきてくれたらいいと思います。福祉施設は郊外に山のようにあって物件探してますから。あと、やっぱり私たちの側から出向かないといけない。特に私。事務所にいるんじゃないかな。いろいろな人と出会って話をしないと形にならないですよ。

瑛：冒頭で、竹村さんがまちづくりっていうのも福祉なんだと明言されましたよね。この考え方、ほんとうに革命的ですよ。コミュニティを作ったり場を作っていくことだけでなく、ビジネスだって福祉なんだという前提に立っている。そのうえで、狭義の福祉に関わる側の言葉のチャンネルが足りないというのが竹村さんの指摘でした。専門性ではなく、相手に届く言葉で伝えていかなければ伝わらないんだと。竹村さんのコメントは決して福祉とビジネスを分断するものではないですよ。

竹村：フォローありがとうございます。私はね、決して福祉と経済、まちづくりを分断させようとは思っていませんし、福祉の人たちの専門性を否定するものでもありません。ただ、もう少し軽やかに対話をしようというとき、ビジネスで解決できるかもしれないし、いろいろな人に関心を持ってもらうやり方があるはずだと言うことなんです。

瑛：あらためて、ちまた会議のビジョンを読み返してみると、私たちは何より大事なものとして「個人」を掲げて宣言をつくりました。福祉だろうがビジネスだろうが、まずは個人によってまちが作られるものですよ。そして、その個人が何をしたいかという希望が「プロジェクト」化され、そのプロジェクトを通じて多様な人たちが出会うことで、そこに場が生まれます。まちというのは、そういう「場の集積」によって形作られたものなんじゃないかと思えます。ただ、今日話を聞いていて、ビジネスの観点からもアドバイスをもらって、意見交換しながら作り替えていくことも考えないといけないなと思いました。

辻：ぼくも、福祉とビジネスを分けなくていい

と思いますよ。足元にある、自分の子育てとか介護とか、そういう暮らしの問題、生活の課題ってクリエイターにもあると思います。お互いの言葉を共有し、ビジネスにつながるかもしれない期待しつつも、人間の根本に立ち返ることもできる。それが福祉の良さですよ。そういう他者の尊重、個を認め合おうという倫理観が、まち全体の寛容性につながっていきやすいのかなって思いますし、自分の福祉、自分の生活をどんどん開陳していったらいいのになって思うんです。

小松：現代って、仕事か家庭かのどちらか一方しかない。たとえばぼくたちが配る名刺にも、立場や肩書ではなく、もっと生身のオリジナリティある自分に紐づいたものが記されてもいいのかもしれない。さっき、瑛さんがちまた会議のビジョンを紹介してくれました。まちは個人から作られるって。その個人の中にあるなにかをひょいっと持ち出せる、そんな場をつくっておくことが大事なんだと思います。

本後：わかる気がします。私もまちで生きてきて、親であって、部下の上司でもある。厚生労働省の職員の立場じゃなくてね、それぞれに、それぞれの立場、認識があるものです。いま、住んでる地区の10世帯くらいの班長をやっているんですが、一番の心配事は、近所に住んでいる90歳の白内障のおばあちゃんです。もしおばあちゃんになにかあったとき私が気付けるだろうか。でも、そんな個人の悩みから他者との取っ掛かりが生まれるかもしれない。

会場：一年間、ちまた会議で議論してきた、だんだんと福祉について考えるようになりましたが、私はビジネスの人間なので本質的な話は正直難しい。でも、竹村さんが言うように福祉の人たちから「なにか一緒に考えようよ」って言ってもらえたら、そういうのは得意なんです。そのくらいのゆるい関係でもいいんじゃないかと思いました。

会場：私は福祉職で地産の商品づくりもしていますが、たしかにクリエイターとのつながりが薄いのは事実です。ですが、ビジネスやクリエイティブなものに興味のあるスタッフもいます。彼らと一緒にこちらから出ていけばいい。地域にはいろいろな人がいて、こうしてつながることができるということ、今日改めて実感できました。

登壇者

小松理虔 こまつ・りけん
ローカル・アクティビスト



福島県いわき市を拠点に、福島第一原子力発電所沖の海洋調査チーム「うみラボ」、いわき市地域包括ケア推進課のコミュニティデザインプロジェクト「igoku」など、食、観光、文化・芸術、福祉などの領域でメディアづくりに関わる。



竹村利道 たけむら・としみち
日本財団公益事業部
国内事業開発チーム
シニアオフィサー

1964年高知市生まれ。駒澤大学文学部社会学部(社会福祉専攻)卒業。医療機関でのソーシャルワーカー勤務を経て、2002年より特定非営利活動法人ワークスみらい高知において就労支援事業を開始。2015年より公益財団法人日本財団で勤務。

辻琢磨 つじ・たくま



辻琢磨建築企画事務所
403architecture [dajiba]

1986年静岡県生まれ。名古屋造形大学特任講師、渡辺隆建築設計事務所非常勤職員。2008年横浜国立大学建設学専攻建築学コース卒業。2014年「富塚の天井」にて第30回吉岡賞受賞。2016年ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展日本館にて審査員特別表彰。



本後健 ほんご・けん
厚生労働省保険局
高齢者医療課長

平成9年厚生省入省。平成27年社会・援護局生活困窮者自立支援室長。その後、厚生労働大臣秘書官、障害保健福祉部障害児・発達障害者支援室長を経て、現在は厚生労働省保険局高齢者医療課長。社会福祉政策と地域づくりの連携に強い思いを持つ。

久保田翠 くぼた・みどり



認定NPO法人
クリエイティブサポートレッツ
理事長

東京藝術大学大学院美術研究科デザイン専攻修了後、建築設計事務所にて環境デザインに従事。重度の知的障害がある長男の誕生を機に2000年クリエイティブサポートレッツ設立。2017年度芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞。法人設立以来、アートを通じた社会的包摂に取り組んでいる。



久保田瑛 くぼた・あき
認定NPO法人
クリエイティブサポートレッツ

1992年静岡県生まれ。2017年慶應義塾大学総合政策学部卒業。在学中は芸術表現活動の社会的役割について研究し、全国50箇所以上の拠点をリサーチ。学生時代から複数拠点暮らしを行い、様々なアートプロジェクトに関わる。2018年からレッツに従事。2020年から「浜松ちまた会議」事業を担当。日々、奮闘中。



まちで暮らす、まちで支える たけしと生活研究会、の試み



たけしと生活研究会（通称「たけ活」）は、2019年、レッツの福祉サービスのメンバーでもあり、重度の知的障害がある青年・久保田壮さんが、親元を離れて自立生活を試みることから始まった。生活全般に介助と見守りが必要な壮さんは、レッツが運営する「たけし文化センター連尺町」の3階にあるゲストハウス付きシェアハウスで、ヘルパーの支援を利用しながら生活している。

このシェアハウスでは、壮さんのほかに二人の障害のある若者が生活を送っている。また、支援者ではない一般の人も、シェアハウスに同居したり、ゲストハウスに宿泊したりしている。たけしと生活研究会は、このシェアハウスでの生活実践や研究を通じて、重度知的障害者の暮らしのあり方について考える活動だ。だが、同じ地域社会で生きている以上、個々の生活は社会と地続きで、それぞれを切り分けて考えることもできない。障害がある人だけの生活を考えていても不十分なのだ。だから、この「たけ活」は、さまざまな人たちがともに暮らす「私たちの生活」について考える研究会として産声を上げた。

壮さんを介して生まれるコミュニティ

久保田壮さん26歳。重度の知的障害があり、言葉で自分の調子や状況を説明することが難

しい。食事や排泄、入浴、あるいは衣服の脱ぎ着を一人では行うことができず、全面的な介助が必要だ。ヘルパーたちは、日々格闘しながら、試行錯誤をしながら壮さんの暮らしを支えている。

壮さんの活動を支える主体となっているのが、クリエイティブサポートレッツのヘルパー事業所「アルス・ノヴァ ULTRA」だ。今から数年前、レッツは、知的障害者の自立を支えるためにはヘルパーが必要と、自前でヘルパー事業所を作ってしまった。これまでの活動についてULTRAのスタッフ、ササキユイチさんに話を聞くと、「そう簡単にこれまでの活動をまとめるのは困難」としうえて、重要な二つの気づきを教えてくれた。

まず、壮さんを介して、コミュニティが生まれているということ。壮さんは、ヘルパーだけでなく看護や医療のサービスも利用している。まさに多様な背景を持つ人たちが、「壮さんの生活を支える」という一つの目的のために日々、壮さんの周囲に集まっていくということだ。ササキさんは「価値観や生活感、背景の異なる人が集まって、壮さんの生活を真剣に考えている。これってアートプロジェクトだと思う」と語る。

気づくと、壮さんの顔見知りが増えた。壮さんの散歩コースに、壮さんのことを気にかけてくれる人が増えたのだ。そして、

徒歩圏内の地域に、コミュニティが浮かび上がってきた。

街をリビングルームのように

もう一つの気づきが「壮さんが、街全体をリビングルームのように使っている」ということだ。壮さんは、年がら年中「石あそび」の活動をしている。タッパーに石を入れて、かちかちや鳴らすというもので、ササキさんによれば「眠りに入る直前までやってる」というから、その表現は壮さんにとっては絶対になくはないものなのだ。

毎日夕方になると、壮さんはヘルパーとともに夕食の買い物ついでに散歩をする。まちにはいろいろな「石スポット」があり、壮さんは石スポットで石を拾ってはタッパーに入れて、かちかちやとやるのだ。「Googleマップに石スポットを記録していったら、あつという間に50カ所を超えてしまい、ポイントだらけになってマップの意味がないので辞めた」とササキさんは話す。

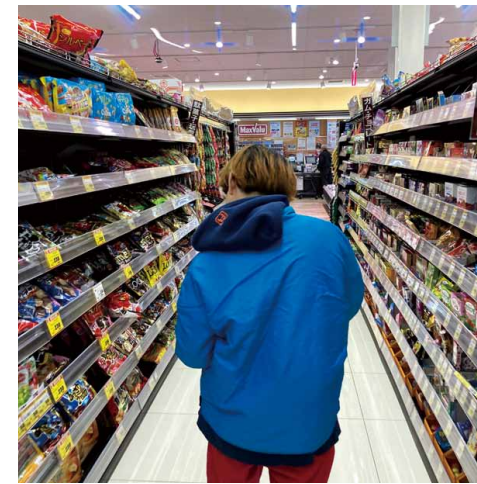
だがササキさんは、そこである重要な気づきを得た。「石スポットを巡るなかで、壮さんはほととはまったく違う捉え方でまちを見ているんだなと気づきました。そして思いました。ああ、壮さんの生活空間というのは、まちと自然に重なってるな。まちをリビングルームのように使っているんだなと気づかされたんです」。



壮さんは最近、石だけでなくお店で売られている「飴」にも強い関心を持つようになったという。コンビニスーパー、個人経営のドラッグストアなど、いろいろなところで、袋入りの飴に触れ、シャカシャカと音を鳴ら

クリエイティブサポートレッツはこの数年、これまで郊外で行うことが主流だった福祉の取り組みを、まちなかに実装する取り組みを続けている。特に力を入れているのが「たけしと生活研究会」だ。重度の知的障害のある青年、久保田壮さんが、ヘルパーや友人、突然の訪問者たちの手を借りながら自立生活を送ることを通じて、周囲の人たちも一緒になって福祉や地域、まち、暮らし、さまざまなものを研究していこうという活動である。まちづくりと福祉、その最前線を追った。

し、棚に戻す。ササキさんたちはこれを「あめ活」と呼び、その活動を通じて、壮さんとともにまちに関わり続けている。



「最近では、店の人も少しずつ状況に慣れて、壮さんが触ったものでも『このくらいなら大丈夫』と声をかけてくれることも増えましたし、壮さんがお店で寝転がってしまったとしても、店員さんたちは取り乱すことはありません。そうして壮さんが行くところで、さまざまな影響を、まちの人たちに与えている。ああ、壮さんの飴へのこだわりを通じて、まちと、これまでとは違う関係を切り結ぶこともできるんじゃないかと感じるようになりました」（ササキさん）

ササキさんはもう一つ、こんなエピソードを話してくれた。「ある日の散歩で、壮さんの飴への情熱が急に高まってしまって、車道に出そうになってしまったことがあったんです。慌てて止めに入ったところで、たまたま隣にあったレストランのシェフが大丈夫かって声をかけてくれました。こちらから大丈夫ですよと返事をしたので、シェフも店に戻ったんですが、すぐに出てきてほくたちにブドウをくれたんです。後になって付き添っていたヘルパーがこんなことを言っていました。壮さんを通じて、自分もまちの一員として受け入れてもらえた気がしたって」。

壮さんたちが作り出す、交差点

なんと奇跡的なことだろうか。壮さんたちがいることで、そして、壮さんたちがありのままの姿を見せてくれることで、さまざまな人た

ちが彼らを支えるために呼び寄せられ、巻き込まれ、コミュニティを作り出し、「まちの一員」という自覚まで生み出しているのだから。

ササキさんによると、以前、シェアハウスを訪れた客人が、こんな言葉を書き残したそうだ。

重度知的障害者の彼ら（と周りの支援者や親）が、葛藤はあったにせよ自立生活に挑戦し、その興味深いライフスタイルをありのままにさらけ出しているおかげで、このシェアハウスは私のような人間を呼び寄せている。そして居着かせている。支援される人／する人／他者が偶然に出会う「交差点」として機能している。（高本友子さんの言葉）

ササキさんはいう。「まちというのは、具体的なエリアやハードのことであると同時に、人と人が交わる交差点のことかもしれないと思うようになりました。その意味で、壮さんはまちをつくってると思うんです。関係性とかコミュニティとかを、実際につくってるんですよ。ほくもそこに加わっているし、外からくる人も加わっているんです。立ち会ってるんです。壮さんがつくりだす交差点に」。

多様な人と人が出会い、交差し、その交差

点から、まちがつくられる。まさにその交差点のことを、私たちは「ちまた」と呼んできた。しかしいま、ササキさんの話を聞いて、こんなことも言えるのではないだろうかと思う。「ちまた」とは「福祉」と「まちづくり」とが出会う交差点でもあったのだと。

そして改めて、こんなことも考えた。さまざまな人を巻き込み、徒歩圏内にさまざまなコミュニティをつくってきた久保田壮さんこそ、じつは、「浜松ちまたビジョン」を体現する一人だったのだと。



2021年度「たけしと生活研究会」では、壮さんやその介助者たち、そして壮さんが街で出会った人々と協働して、ともに暮らすを考えるフリーペーパー「たけしと生活研究会 MAGAZINE」を創刊しました。お求めは「たけしと生活研究会」の公式noteをチェック！

<https://note.com/takekatsu2019/>



レッツ代表 久保田翠が描く レッツのこれまで、そしてこれから

「街はだれのもの？ 人がいるから街になる」

私は現在、浜松市中心市街地から6kmほど離れた郊外に住んでいる。

住んでいる地域は、自然環境に恵まれ、庭や家も比較的大きい。20年前、私と夫、2人の子供（長男は重度の知的障害者）、そして猫2匹と大型犬1匹がのびのびと生活したいと思い、中古住宅を購入した。

長女が小学生の頃までは地域とのつながりがあった。それは子どもを通じてのつながりで、子供会の役員をやったこともある。しかし、娘が中学に入ると、地域とのつながりはあまりなくなった。長男は重度知的障害があり、地域の学校ではなく、家から20kmほど離れた特別支援学校に通っていた。私はすでにクリエイティブサポートレッツを立ち上げていたので、子どもの世話と仕事に費やす時間が多くなり、自然と地域との縁は薄くなっていった。

その頃からか、犬のことや猫のことで、ご近所とトラブルになることが増えていった。また障害のある子どもの音や振る舞いで注意をうけることも多くなった。そして、私たち家族は、あまり地域を出歩かなくなっていった。

私は今、夫が亡くなり、子どもも自立しはじめ、この広い家に一人で生活している。

一方で、重度知的障害のある長男「たけし」は、中心市街地にある「たけし文化センター連尺町」の中にあるシェアハウスで、ヘルパーさんの支援を受けながら生活している。日中も、同センターにある障害福祉サービス事業所「アルス・ノヴァ」に通っている。たけしは毎日街を闊歩し、買い物をして、雑貨屋やゲームセンターに遊びに行き、時にはライブハウスにヘルパーさんと行くなど、20代の若者らしい暮らしをしている。

もし、たけしがそのまま郊外で生活していたら、私たちは、ご近所に迷惑がかからないように、家に引きこもるしかなかったかもしれない。彼の自由闊達な生活スタイルは、いわゆる閑静な住宅地には決定的に合わなかった。また常に家族で何とかしなければいけない環境も私たちにはしんどかった。

今、たけしは、厳格にルールが守れなくて

も、音や振る舞いに多少逸脱するところがあっても、街で生き生きと生活している。それは、街が持つ多様性や、寛容性に助けられているからだと思う。

レッツは2018年にたけし文化センター連尺町を、中心市街地に建設した。

毎日30名ほどの重度の知的障害のある人が活動する、障害福祉サービス事業所「アルス・ノヴァ」がある。アルス・ノヴァには、一般的な障害福祉施設で行われている作業がない。ここは自分の好きなことをやる場所だ。1日音楽を聴いている人、寝ている人、走り回っている人、ゲームをやっている人などさまざま。そしてなるべく街に出かけ、街に関わりをつくるようにしている。同時にここは、文化センターとしての機能もある。月に1回行われている「玄関ライブ」、哲学カフェの「ミドのヴぁ」、「かたりのヴぁ」や、定期的に誰でも参加できる本格的なクラブを開催したり、「のヴぁてれび」というYouTubeチャンネルでアルス・ノヴァの日々を発信している。

どこの地域にも、障害者、高齢者、子どもなどの福祉施設は必ず1つはある。しかし、その施設でサービスを受けることができる人は限定されている。しかし、福祉施設がサービス対象者以外の人たちの「居場所」になれば、地域の社会資源は一気に増え、様々な社会課題（引きこもり、孤立、格差、断絶、コミュニティなど）の解決につながっていく。レッツではこれを「福祉施設の社会資源化」として、2010年から取り組んでいる。そして、「たけし文化センター連尺町」は、障害福祉施設であるとともに街の文化創造発信拠点を目指している。

一方で、重度の知的障害者の施設のほとんどが、人があまり住んでいない郊外にある。私が、たけしを通して障害福祉の世界に入った時に、まず違和感を感じたのはこの環境だった。施設の建物はどこも立派ではあるが、そこには障害者と支援者しかいない。恋をしたり、友達になったり、人と出会って刺激を受けたり、私たちが当たり前と思う

出来事もなく、彼らは人里離れた場所で、多様な人たちと交流する機会も、だれにも自分のことを知ってもらう機会もなく、一生を終えるのだろうか。

たけし文化センター連尺町は浜松駅から800mの街のど真ん中にある。ここに最も重い知的障害のある人たちが活動し生活する拠点をつつた。人口80万人の浜松の街は人が少なくなったとはいえ、郊外や、私の住んでいる地域よりも確実に人に出会う機会がある。そして、彼らにとって街は、交通の便もよく、様々な経験と出会いの機会が多くあり、とても暮らしやすいのである。

「まちづくり」は今まで、道路をつくったり、建物を建てたりと、コトやモノの整備が優先されてきた。しかし建物をつくっても、道路を整備しても、イベントを行っても、結局にぎわいを作り出すことはできなかった。そしてコロナ禍はそんな街の、弱点をさらに顕在化させた。

ネイバーフットシティという考え方がある。徒歩15分圏内に「私」が幸せに生きるためのセーフティネットがあることを指すのだが、そこで重要となるのは、モノやコトではなく、結局、人なのではないかと思う。

「寂しい時に一緒にご飯を食べてくれる人」「声をかけてくれる人」「困った時に助けてくれる人」そんな人が15分圏内にいたら人は結構幸せに生きることができる。そしてそれぞれの徒歩15分圏内が重なり合って街が出来上がったら、どんな姿になるだろうか。

福祉が、人が人をケアし、幸せに、健やかに生きるためにあるとするのなら、今、福祉を実現する場として「街」を考えてみたい。そして「ふくし=まちづくり」といった価値観を作り出せたならば、それは福祉の可能性を広げ、街のあり方をダイナミックに変えていくのかもしれない。

認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ
理事長 久保田翠



LET'S HISTORY レッツ年表

- 2000年4月 クリエイティブサポートレッツ設立
- 2004年2月 NPO法人化
- 2006年11月 「商展 SHOW-TEN 2006」を浜松市と静岡市で開催
ゆりの木通り商店街や静岡市紺屋町商店街にて障害がある人の作品を「ひそませる」展示実施
- 2008年3月 「浜松アートフォーラム2008」実施
浜松市鶴江別館（現：鶴江アートセンター）の保存活動を市民とともに実施。北川フラム氏をゲストに招いたフォーラムや先駆的作品展示の実践を行う
- 2009年10月 ~ 2010年3月 実験事業「たけし文化センター BUNSENDO」
旧文泉堂書店空き店舗を舞台に、アートと福祉が融合したアートセンター事業と社会実験を実施。全国から述べ5000人以上が来館
- 2010年4月 障害福祉サービス事業所「アルス・ノヴァ」を浜松市入野町でスタート
- 2011年6月 ~ 2014年3月 たけし文化センター INFOLOUNGE
ゆりの木通りの「万年橋パークビル」1階にて全国各地のイベント情報が閲覧できるコミュニティスペースを運営。
- 2015年3月 全国アートNPOフォーラム in 浜松開催
- 2017年1月 ~ 2月 「表現未満、」実験室
浜松市中区鍛冶町の金原ビルを1ヶ月借りて、障害がある人の居場所や音楽ライブ、講座などを行うオルタナティブスペースを期間限定でオープン。
- 2018年3月 代表理事久保田翠が「表現未満、実験室 その他」で平成29年度芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞
- 2018年11月 「たけし文化センター連尺町」建設
浜松駅から徒歩7分の浜松市連尺町に障害福祉施設、音楽スタジオ、シェアハウス・ゲストハウスが併設するオルタナティブスペースをオープン。
- 2020年11月 浜松ちまた会議スタート
浜松市中心部の企業・団体とネットワークをつくり、福祉を軸にしたネイバーフッドシティ構想を推進中

現代書館

ただ、そこにいる人たち
小松理虔さん「表現未満、」の旅



レッツが運営する障害福祉サービス事業所アルス・ノヴァに福島県いわき市在住のローカルアクティビスト小松理虔さんが1年かけて定期的に滞在、観光。障害者福祉の「部外者」が日常をともにするなかで「友だち」に変わっていく様子をのびのびとした筆致で鮮やかに記録。東浩紀、國分功一郎両氏などの哲学のエッセンスも満載。哲学者、鷲田清一氏推薦。

発行/2020年11月30日

著者/小松理虔

認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ

発行所/株式会社現代書館

ブックデザイン/ BOB.des'

(ウエダトモミ)



編集後記

まちづくりを考えたら、福祉にたどりついた。冊子の制作を進めながら何度「このタイトルの通りだなあ」と思っただろう。当然「まち」は自分ひとりでは成り立たない。子どもたち、中高生や若い世代に高齢者、単身者に家族連れ、車のない人……むしろ「自分以外の人たちの幸せや居心地」みたいなものまで考えていかないと、まちは独りよがりになってしまうはずだ。ところが、現実はどうか。ある一定の限られた属性の人たちだけで考えられていないだろうか。いま改めて思うのは、いかに「オレっぽくない人」たちとつながるかを考えないとダメだ、ということ。あれれ。これまでとは真逆の考え方になってしまった。福祉、恐るべし！（小松理虔）



LET'S



認定NPO法人 **クリエイティブサポートレッツ**

〒430-0939 静岡県浜松市中区連尺町314-30

TEL : 053-451-1355

MAIL: lets-arsnova@nifty.com

お問い合わせ

運営拠点・事業所

【たけし文化センター連尺町】 通称、「たけぶん連尺町」。重度の知的障害者を核としながら、様々な人たちが集い・学び・交流する文化センター。名前のとおり、浜松市中区連尺町にて運営中。

【障害福祉サービス事業所 アルス・ノヴァ】 大人から子どもまで、様々なメンバーが利用する障害福祉施設。「障害のある人の多様な生き方」を実現すべく、連尺町と入野町の2拠点で活動中。

【ヘルパー事業所アルス・ノヴァ ULTRA】 重度知的障害者の「文化的で自立した暮らし」の実現を目指し、生活のアシスト活動を行っている。同時に、休日の外出支援を浜松市内全域で展開中。

二〇二二年度事業報告書
まちづくりを考えたら、福祉にたどりついた
【発行】 2022年3月
【発行者】 認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ
【執筆・編集】 小松理虔（ヘキレキ舎）
【デザイン】 佐藤洋美（余地）
文化庁委託事業「令和3年度障害者等による文化芸術活動推進事業（文化芸術による共生社会の推進を含む）」
主催／文化庁、認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ
助成／日本財団、公益財団法人福武財団
支援／アーツカウンシルしずおか
※アーツカウンシルしずおかは「アーツカウンシルしずおかが、まちづくりや観光、国際交流、福祉、教育、産業など、社会の様々な分野と文化芸術を結び付け、社会課題への対応や地域の活性化を目指す住民主体の創造的な活動を支援します。」
文化庁

